

オーガナイズドセッション「参照と反省の認知科学：難しい意思決定の物語」のアウトライン

Outline of the Organized Session

“Cognitive Science of Referencing and Reflecting: A Story of Difficult Decision Making”

齋藤 洋典[†], 小橋 康章[‡]
Hirofumi Saito, Yasuaki Kobashi

[†] 中部大学, [‡] 株式会社大化社
Chubu University, Taikasha, Co.Ltd.
kobashi@taikasha.com

概要

企画運営者の一人の実体験をもとにした一連の意思決定に関わる「物語」を参照しつつ、意思決定研究や物語研究、当事者の主観といった異なる立場からの知見を交換する。一般参加者の積極的なコメントや質問を歓迎する。

キーワード：認知科学, 方法論, 意思決定, 物語, 合理性, 不条理, 抜け落ちる意思, 相反概念

1. はじめに

こここのところ毎年のように齋藤洋典と小橋康章の企画運営で続けているこのオーガナイズドセッションのルーツは2013年前後に日本認知科学会の30周年の機会に開催した、認知科学(会)のこれからの30年を考えると称するワークショップだった。その後の曲折を経て、「認知科学の未来を考える」を共通テーマにしたWS/OSとして続いている。そういう性質から、完結した研究の発表会でもなく、学会内のミニ学会でもない。一方で、一般参加者の発言の機会を極力提供する場にはなっている。

齋藤と小橋の目論見は100%一致しているわけではなく、同じく「認知科学の未来を考え」つつも、齋藤はこれまで扱われてこなかった重要な認知科学的研究課題のあぶり出しに強い関心を持ち、「意味学」の構想を秘めている。小橋は社会と学会の超(々)高齢化がもたらす課題と機会に関心を深めている。このズレはこれまでのところ共同作業にある種のダイナミズムを与え、マンネリ化を防いでいる。

今回のテーマである「参照と反省の認知科学：難しい意思決定の物語」の意味するところは、論文や教科書や実験室の中で論じられる意思決定だけではなく、日常生活の中に現れる(場合によっては非日常的な)

意思決定をどんなふう物語ったら新たな研究課題が生じるか、またその課題の解決の糸口が見通せるかを明らかにすることである。このため意思決定論や物語研究、裁判における目撃供述の扱いといった難しい意思決定等、それぞれの専門家をお招きした。また、客観的事実を参照しつつも主観的な、そして価値判断を伴う見直しを通して、見逃されがちな研究課題を探索するプロセスには、専門家だけではなく素人と呼ばれる日常生活のエキスパートの参画が欠かせないと考え

2. 発表者の構成

話題提供(招待講演)

- (1) 齋藤洋典 名古屋大学名誉教授 中部大学教授
- (2) 竹村和久 早稲田大学教授, 同大学意思決定研究所所長
- (3) 布山美慕 立命館大学文学部准教授
- (4) 巖島行雄 人間環境大学特任教授

3. タイムテーブル

時間枠(120分)内のタイムテーブル

- (1) イントロダクション 5分 小橋康章
- (2) 話題提供1 15分 齋藤洋典 難しい意思決定の現場から
- (3) 話題提供2 20分 竹村和久 悪い意思決定を回避するために
- (4) 話題提供3 20分 布山美慕 文章理解から意思決定への示唆
- (5) 話題提供4 15分 巖島行雄 意思決定における言い訳の役割(仮題)

(6) コメント 20分 齋藤洋典 意思決定の意味は何からできているのか

(7) 全体ディスカッション 25分

4. 話題提供の要旨

4-1. 難しい意思決定の現場から意思決定の意味は何からできているのかを考える

氏名：齋藤洋典

所属：名古屋大学名誉教授 中部大学教授

要旨：

【難しい意思決定の現場から】

一般に決定事項にはその決定への参加を望んだが、参加できなかった人々の意思（思いや願い）が抜け落ちがちである。公式の意思表示は、読むことが可能で、数えることが可能な、いわゆる客観的な形式を保つことに執心するために、そこから抜け落ちる意思がある。また抜け落ちた意思は時間経過とともに忘れられ、たどれなくなる。

意思決定研究に限らず、型通りの調査や研究は通常期待される形式への対応に追われると、形式への対応は、取り扱う情報処理の速度や精度の改善という技術問題へと向かう。だが、処理技術の向上は問題解決の一端に過ぎない。問題の根源は思考の推進力を何に求め、何がその発動を妨げるのか、そうした探求の麻痺にある。かくして、当該の意思決定の枠組みへの参加を果たせない人々の意思は汲み取られず、その願いが掬い上げられることは稀であり続ける。

【意思決定の意味は何からできているのかを考える】

こうした構造的な特性によって、認められた条理に基づく見解は採用され、不条理は取り上げられることが少ない。これは特定の分野の研究に限ったことではなく、こうした指摘もなんら新しいものでもないが、一抹の重要な真実を含む。昨今の社会現象にもこうした構造的な特性から、本来掬い上げられるべき本質的な問題が取り上げられず、形式的な広義の意思決定が、同一問題の流布と反復を招いていると考えられる。

条理と不条理に代表される「一対」の相反概念の対比は思考を整える上で欠くことができない道具（カンフル剤）であるが、そうした相反概念「群」を新たな思考の飛躍台として利用するためには、さて何を必要とするのだろうか。まず、具体的な意思決定の事例を正規の教育課程（正課）ではなく、教育課程外（課

外）の活動中の事故とそれへの対応に求める。次に、従来の相反概念をめぐる研究動向を俯瞰し、私たちの意思決定の意味は何からできているのかに向かう。そして、いったん呑み込んだものごとを物語るという咀嚼（そしゃく）行為—よく考えて、理解し、味わうこと—のもつ意味に触れる。

4-2. 悪い意思決定を回避するために

氏名：竹村和久

所属：早稲田大学

要旨：これまで行動経済学や行動意思決定論の研究では、Kahnemanらの研究に代表されるように、期待効用理論などの合理性を仮定した理論体系からの逸脱現象から意思決定モデルを作成したり生態学的合理性の観点などからそれらの逸脱現象を説明することが多くなされてきたが、このような試みだけでは、人間の意思決定の不合理性を説明したり、回避するための指針は得ることは難しいと思われる。本発表では、意思決定の合理性と不合理性について公理的観点から考察を行い、合理性や不合理性の問題と期待効用理論のような理論体系とは必ずしもパラレルな問題ではないことを指摘する。また、意思決定の不合理性についての、ヒューリスティクスの観点からの説明はあまり本質的ではなく、むしろ重要な属性の重みづけの仕方や価値の選択の問題が本質的にかかわることを、理論的分析やシミュレーション、心理実験の結果から説明することを試みる。

4-3. 文章理解から意思決定への示唆

氏名：布山美慕

所属：立命館大学文学部

要旨：これまで発表者は、文章理解における部分と全体の循環的理解—解釈学的循環や、意味を定めないまま読み進める不定な理解に興味を持ち研究を進めてきた。他方で先行研究によって、文章理解時には現実世界のシミュレーションがなされるとする仮説も提唱・検証されており、物語理解をはじめとする文章理解と現実世界の理解の間の部分的な共通性が示唆される。これらを併せて考えると、文章理解中に行われる解釈学的循環や不定な理解は現実世界の理解に際してもなされる可能性がある。本発表では、主に発表者の文章理解研究について発表し、本OSへの一つの視点の提示としたい。

4-4. 意思決定における言い訳の役割 (仮題)

氏名：巖島行雄

所属：人間環境大学

要旨：目撃供述の心理学を裁判の場で実践してきたために、殺人罪に問われた被告人の冤罪につき合うことが多い。そこでは、心理学者（私）の目撃者の証言の信用性評価と、裁判官の判断が全く食い違うということが起こる。どれほどの科学的結果を示しても、それが人を裁くという特権を持つ裁判官に届かないことがある。彼らの意思決定には何が潜んで知なのか？彼らには経験則という奇妙なスキーマがあり、そのスキーマの操作方略に何か特異な原則が存在するのだろうか？今回、死刑という意思決定の背後に潜むその原則を探る試みを展開したい。